豊かな自然 孫に誓う

来場者の注目を集めたコウノトリ「唐子」のはく製＝6日、越前市武生五中体育館

はく製「唐子」お披露目

血統戻り 住民ら万感

40年前に武生市（現越前市）白山・坂口地区に飛来した「コウちゃん(武生)」の孫で、昨年10月に豊岡市で放鳥された後、12月に三重県で死んだ雌の「唐子(とうこ)」がはく製化され、「大作戦」会場の武生五中体育館に展示された。コウちゃんの血を引くコウノトリの〝里帰り〟とあって、地元の人たちは、唐子を通してさまざまな思いをめぐらせた。

地元住民の要望などを受け、冷凍保存されていた個体を越前市が兵庫県から譲り受け、はく製化した。

唐子の放鳥に立ち会った野村みゆきさん(51)＝同市中津原町＝は「餌不足で死んだと聞いたときは、日本の生息環境がまだまだ不十分なんだと痛感した。大空を羽ばたいてこの地に帰ってきたかっただろうな」と複雑な表情を見せた。

唐子のりりしい立ち姿に見入って「コウちゃんに何となく似ている気がする」とつぶやいたのは、コウちゃんが飛来した40年前に白山小児童として餌集めに奔走した前田利博さん(50)＝同市堀町。「大空を舞っていた唐子がなぜ、はく製になって帰ってくることになったのか。餓死せずにすむ豊かな自然を取り戻してほしいというのが、はく製になった唐子のメッセージではないだろうか。それをしっかり受け止めないといけない」と話した。

式典の中ではく製の贈呈式が行われ、兵庫県教委の溝口繁美教育次長は「福井県や越前市と力を合わせ、身近にコウノトリがいる風景をこの地でも実現させたい」と述べた。

唐子はコウちゃんの孫4羽のうちの1羽で、2005年4月にコウちゃんの〝一人娘〟の「紫」から生まれた。他の2羽は放鳥され、1羽は兵庫県立コウノトリの郷(さと)公園で飼育されている。

唐子のはく製は今後、越前市公会堂記念館で展示される予定。

手作りの米贈呈

○…里山クイズウオークラリーに先立ち、白山公民館前では「コウノトリ呼び戻す田んぼサポーター」への収穫米の贈呈式が行われた。

51人のサポーターが今春から9月にかけて、越前市白山地区の田んぼで無農薬無化学肥料の米作り体験を行ってきた。代表して、越前市の木谷美紀さん家族4人が、活動を主催する「水辺と生き物を守る農家と市民の会」の堀江照夫会長から、米と感謝状を受け取った＝写真。

長女の恭子さん(12)は「自分たちで作ったお米は重みがある。田んぼには生きものがたくさんいることが分かったし、どの作業もとても楽しかった」と話していた。サポーターには、それぞれ収穫米5キロが配られた。

里山の大切さ 歩き実感

親子連れら88人満喫

里山の風情の中、クイズを楽しむ子どもたち＝6日、越前市二階堂町

越前市白山・坂口地区のながら探索するウオークラリーが、シンポジウム会場を発着点に行われた。秋晴れの下で親子連れら88人が里山の豊かな自然と大切さを実感した。

白山地区の解雷ケ清水(けらがしょうず)を目指す清水コースに40人、旧白山小学校分校から農園などを巡る里山の食コースに22人、坂口地区の馬借街道を歩く歴史コースに26人が参加した。NHKの徳田章アナウンサーが案内役となり、各コースの要所でクイズの出題や見どころの解説をした。

全長6キロの清水コースには、「えっちゃん」の名で親しまれたコウノトリが今年4月から107日間いた、越前市王子保地区の児童と保護者が参加した。子どもたちは色づき始めた山や、小川が流れる田園を眺めながら散策。道端のススキの穂など秋の草花を手にはしゃぐ姿も見られた。

里山の澄んだ空気を満喫したという飯嶋莉子さん（王子保小5年）と守内優芽さん（同）は「えっちゃんが3カ月半で王子保地区を飛び去ってしまったということは、まだまだ自然の豊かさが十分ではないのだと思う。コウノトリがずっと住んでくれる古里になるように自然を大切にしていきたい」と話していた。

福井新聞
© 福井新聞社　無断複製・転載を禁じます